

令和6年12月20日

## 12月の木材価格・需給動向

### 1. 国産材(北関東)

栃木県では12月に入り、間伐・皆伐とも作業は順調に進行しており、今後、順調に入荷する予定。県北地域では安定した皆伐作業が始まったが、間伐も実施しているため出材量は変わらない。県西地域では間伐主体のため出材量は少な目である。スギは3.0m柱材で17,000円台、4.0m中目材も17,000円台で推移。ヒノキ材は品不足から値上がっており、3.0m柱材で20,000円台、4.0m中目材は24,000円台で推移している。

群馬県では原木集荷が困難。スギ、ヒノキとも原木不足で特にスギ4.0m材が集荷難であるが、少しずつではあるが、入荷している。製材工場の原木在庫は例年同期の30%程度。製品販売は首都圏・地場向けとも低調。年末に向けての多少の受注残はあるが、例年末の忙しさは見られない。製品在庫は間柱、仮筋、貫等は少なく、割物や破風板類がダブっている。柱等の角類は均衡。4m90角・105角KDは原木不足で少ない。

### 2. 米材

11月の米国住宅着工数は128.9万戸(年率換算)で前月比1.8%減、前年同月比では14.6%減となった。米国製材品市況は10月中旬に\$400/MBFを突破し、SPFの急騰に引っ張られ上昇したが、冬場の不需要期でそろそろ天井感が出ている。ランダムレンジス紙発表の15種平均価格(11/28)は446/MBF、11月頭に比べ3.7%のアップ。米国内、中国、日本の原木需要が低調である中、伐採は順調で原木の港頭在庫は潤沢な水準にある。米マツIS級並の12月積み対日輸出価格は未確認情報ながら前月比横ばいの\$940/千SCRで決着した模様。

10月原木入荷は115千 $m^3$ で前月比減少、中国地区への入荷が8割超と偏重、1~10月累計では1,246千 $m^3$ (前年同期比16.7%減)。出荷は116千 $m^3$ でほぼ入荷と同量、出荷も中国地区が9割弱を占め偏重、1~10月累計では1,272千 $m^3$ (同14.9%減)となった。在庫は193千 $m^3$ 、在庫率は1.60ヵ月。東京木材埠頭の11月製品入荷は6千 $m^3$ (前月比17.9%減)、出荷は11千 $m^3$ (同17.6%減)、在庫は30千 $m^3$ (同12.9%減)。国内米材製材メーカーへの発注も芳しくない状況が続いている。

### 3. 欧州材

第4・四半期(10~12月積み)は産地価格の値下げ調整があったが、日本側の買い意欲は上がり、低調な成約になった。産地サプライヤーは原木、製材コスト、人件費等が上昇しており、不採算に苦しんでいる。11月後半にドイツ製材大手のジューグラー社が破産申請を行い、日本向けの羽柄材への影響が大きい。間柱類は一部サイズに品薄感が出ており、価格も回復基調にある。今後も低水準の入荷が続くので、品不足に転じる可能性が大きい。集成柱・集成梁は中国木材の再値下げにより混乱していたが、国内集成メーカーの出荷が好調なため、価格再上昇の兆しもある。第4・四半期の成約が低調に終わったことから、入荷は低水準が続き、間柱類同様、品不足感が出てくる可能性がある。10月の東京港入荷は17千 $m^3$ と前月比減少、出荷が23千 $m^3$ と一転して活発となった。在庫は59千 $m^3$ と改善され、しばらく入荷水準は回復しな

### 4. 北洋材

産地では11月下旬に気温が下がり、伐採搬出が始まった。製材工場の原木在庫は極めて薄い。中国からの引き合いは強くない。ウズベキスタン等向けの低グレード品の引き合いは堅調である。アカマツ完成品の産地価格は\$590/ $m^3$ が標準となっている。日本側は円安、実需不足のため値下げを要求しても、シッパーは赤字と生産減を背景にに応じてこない。国内でのアカマツ野縁製品は10万円半ばを維持している。上級グレードの品不足と高値張り付きにより中級グレードへの引き合いが強まっている。10月の製品入荷(東京+川崎)は15千 $m^3$ と増加、現地滞留材の集中入荷も一段落し、現地生産が本格化していないため、入荷増は早くて来年2月以降と見られる。出荷は12千 $m^3$ で実需に迫力がない。在庫は31千 $m^3$ で今後も同水準が予想される。

### 5. 合板

合板工場への原木入荷は順調だが、認証材の入荷は限定的である。11月末に主要な合板メーカーが値上げを表明したことで、底値を打ち、値上げに向かうと見られる。10月の合板生産量は22.6万 $m^3$ 。うち針葉樹構造用合板の生産量は19.9 $m^3$ 、出荷量は20.4万 $m^3$ 、在庫量は16.1万 $m^3$ で前月より5.5千 $m^3$ 減少。年末にかけて出荷はさらに増える可能性もある。輸入合板の価格は引き締め感があり、今後は値上げに向かうと見られる。10月の合板輸量は17.7万 $m^3$ で、マレーシアからの輸入量が大きく減少。マレーシア・インドネシア現地シッパーへの日本からの注文はそれほど多くはない。マレーシアでは慢性的な原木不足が継続している。

## 6. 構造用集成材（国内産）

11月のラミナ入港量は前月に比べ2割程度少ないが、適正在庫である。今後は需要減により契約量を絞っていく動きになる。第3・四半期契約のラミナ価格（CIF）は€280～290/m<sup>3</sup>程度。円安傾向で仕入コストは上昇傾向にある。国内集成材メーカーの受注は前年同月比80～90%の水準である。原価、運賃の上昇にもかかわらず、住宅需要が不安定なため、価格はやや弱含みである。10月の構造用集成材の輸入量は小断面19,395 m<sup>3</sup>（前年同月比0.9%減）、中断面15,068 m<sup>3</sup>（同20.5%増）。

## 7. 木材チップ（東海）

原木は製紙・バイオマス発電用とも小径材（C材）の引き合いが強い。燃料材では能登半島地震の震災廃棄物の処分が本格化し、北陸3県及び近県に大量の木くずが搬出されており、一部地域では余剰感が出ている。大手製紙会社では用紙、板紙ともに抄物の集約化を進めており、原料構成が変化している。総じて製紙用原料は減少。バイオマス発電の燃料用は旺盛な消費が継続しているが、冬場の含水率の問題でフル運転できない発電所もある。原料用の在庫は横ばいだが、燃料用は少ないが、一部地域では震災廃棄物の入荷が多い。

## 8. 市売問屋

12月は天候に恵まれているが、材木店の仕事が少なく、材が売れない。先行き値下がりとする向きが多く余分には買わない。国産材構造材に不足感がなく、静かな動きである。原木不足が騒がれているが、製品市況には反映されず、弱保合である。国産材の製材所では造作材にスギ役物の注文材が多く来て、反対に特1の注文が少なく、製材するのにギャップがあり、困惑しているとの声も聞かれる。

## 9. 小売

国産材原木は品不足による価格高が聞こえるが、製品市況は相変わらずの停滞で買い急ぐ動きは見られない。全般に弱気ムードが断ち切れていない。国産材構造材は原木の強含みにもかかわらず、とくに積極的な動きは見られず、様子見の状況である。外材構造材も引き合いは弱いままで、国内挽き米マツKD平角や国産RW集成平角、WW集成管柱ともに弱含んでいる。造作材では、非住宅や店舗向けの細かい注文材が中心で、住宅向けの引き合いは鈍いままである。国産材造作材では安価な良材の平板が少なくなっている。米材造作材ではスプルス、米ツガのクリア盤の入荷が少なく、単価は高値に張り付いている。

参考資料

(一財)日本木材総合情報センター

令和6年12月20日

1. 主要外材入出荷在庫量

		入荷量	出荷量	在庫量
米材	丸太	→	→	→
	製材品	→	→	→
欧州材	製材品	↘	↗	↘
北洋材	製材品	↘	→	↘

注)北洋製材品は東京・川崎

矢印の表示は今月に対する翌月の動向を、下記のように示したものである。

- ↑ 急増・急上昇
- ↗ 増加・上昇
- 横ばい
- ↘ 減少・低下
- ↓ 急減・急落

2. 合板供給量

国内製造量	輸入量		
	計	インドネシア	マレーシア
→	→	→	→

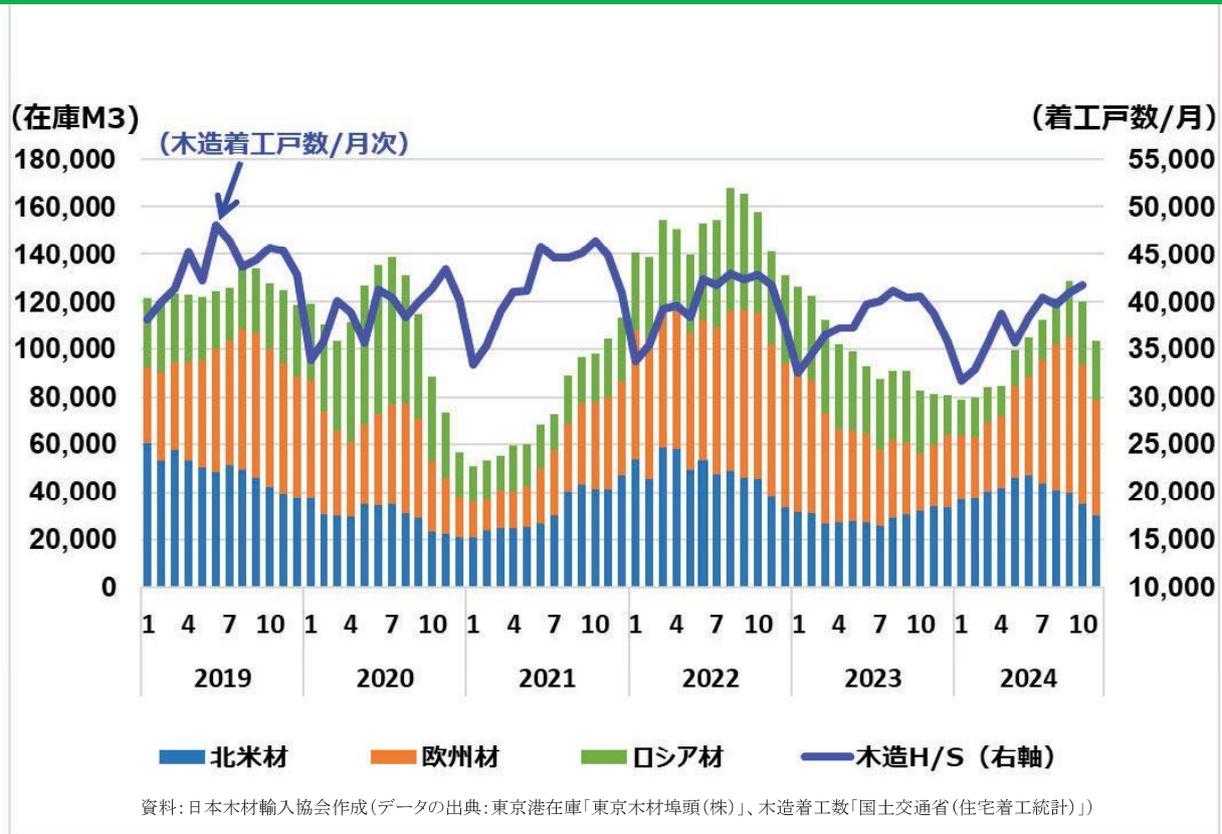
3. 価格動向

樹材種	形状	取引条件	樹種・寸法等	動向
国産材	丸太	卸売価格 (北関東、県内産 市場土場渡し)	スギ柱材(3m) 2等	→
			スギ中丸太(3.65m) 2等	→
			ヒノキ柱材(3m) 2等	↗
			ヒノキ中丸太(4m) 2等	↗
	製材品 (関東近県産 板は東北産)	首都圏・市売り 価格	スギ柱角(KD) 10.5×10.5×3m 特等	→
			スギ柱角(KD) 12.0×12.0×3m 特等	→
			スギ間柱(KD) 10.5×3.0×3m 特等	→
			スギ加工板 1.3×18.0×3.65m 特等	→
			スギタルキ3.0×4.0×3.65m	→
			ヒノキ柱角(KD) 10.5×10.5×3m 特等	→
ヒノキ柱角(KD) 12.0×12.0×3m 特等	→			
ヒノキ土台角(KD) 10.5×10.5×4m 特等	→			
ヒノキ土台角(KD) 12.0×12.0×4m 特等	→			
米材	丸太	産地価格	米マツ ISタイプ	→
		国内卸売価格 (京浜・オントラ)	米マツ ISタイプ コースト	→
	製材品 (カナダ産・ 現地挽き) (国内挽き)	東京・間屋店頭 渡し価格	米ツガ桁角(KD) Std&Btr S4S 10.5×10.5×4m	→
			SPF 2×4 J-Grade R/L	→
欧州材	製材品	東京・間屋店頭 渡し価格	米ヒバ土台角(GR) Std&Btr 4・13/16” 13’	→
			米マツ平角(KD) 特等 10.5×24.0×4m	→
北洋材	製材品	北陸・オントラ 京浜・オントラ	ホワイトウッド’ラミナ 2.4×11.0×3m上 ラフ乱尺	→
			” 間柱類 3.0×10.5×2.985m S4S FOHC	↗
構造用 集成材	国内産	東京・間屋店頭 渡し価格	アカマツ原板(KD) 40×165 1~3等	→
			アカマツ(KD) 30×40上級	→
	欧州産		アカマツ(KD) 24×28 積木	→
			”	”
合板	国産	東京・間屋店頭 渡し価格	ホワイトウッド’ 集成柱 JAS 5プライ	→
			レッドウッド集成梁 JAS 105×150~360×3.985	→
			スギ 無化粧 JAS 5プライ	→
			ホワイトウッド集成柱 JAS 10.5×10.5×2.985	↗
			レッドウッド集成梁 JAS105×150~360×3.985	↗
			タイプ2 F☆☆☆☆ 2.3mm厚 3×6	→
			タイプ2 F☆☆☆☆ 4.0mm厚 3×6	→
			型枠 12.0mm厚 3×6	→
			針葉樹構造用 12.0mm 3×6 F☆☆☆☆	↗

注)令和6年4月調査よりレッドウッド集成梁(国内産、欧州産)、アカマツ原板を追加

参考図表 1

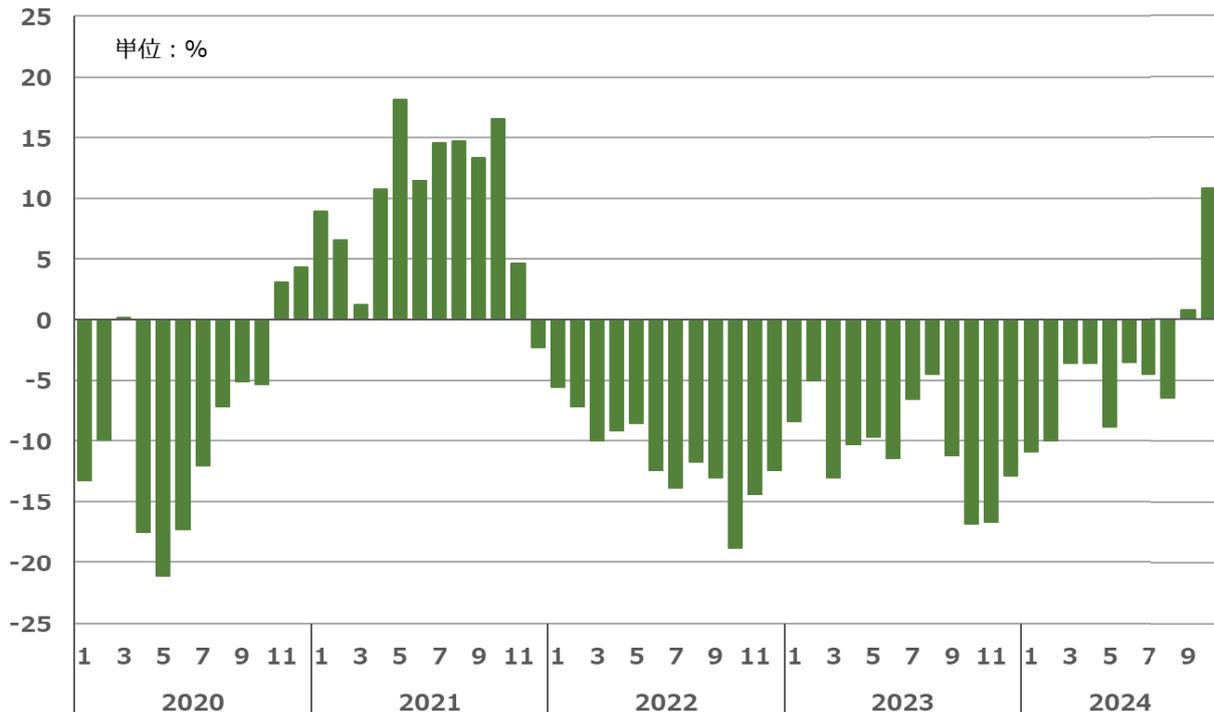
「東京港製材品在庫」と「木造着工数」の推移 2019～24年



参考図表 2

木造持家住宅着工戸数の対前年比の推移

住宅着工戸数のうち、国産材の使用比率が比較的高い「木造持家」着工戸数についての、対前年比率。

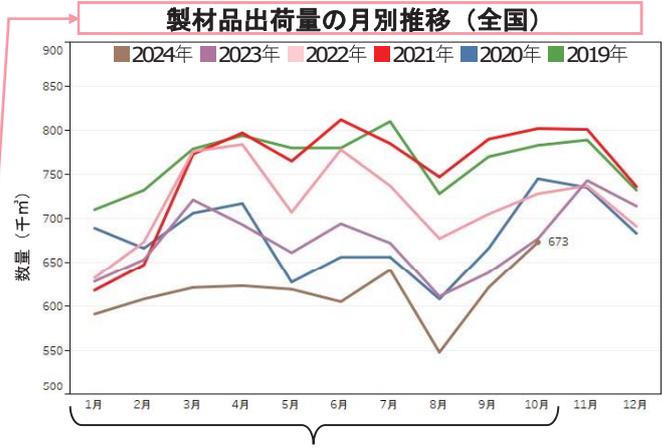
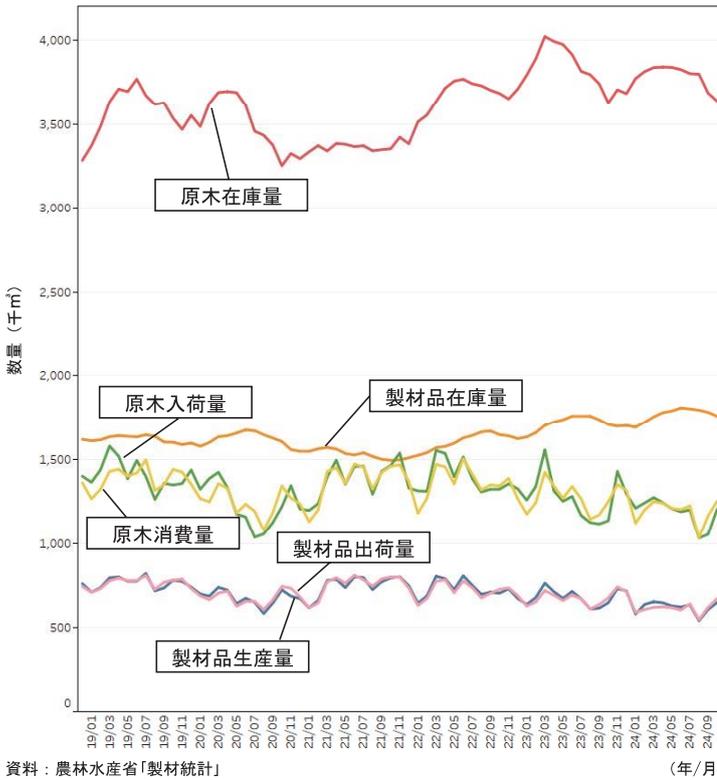


資料：国土交通省「住宅着工統計」

参考図表 3

工場の原木等の入荷、製品の生産等の動向 製材（全国）

- 2024年1～10月の原木の入荷量は11,891千m<sup>3</sup>（2019年比84%）。
- 同様に製材品の出荷量は6,150千m<sup>3</sup>（2019年比80%）。

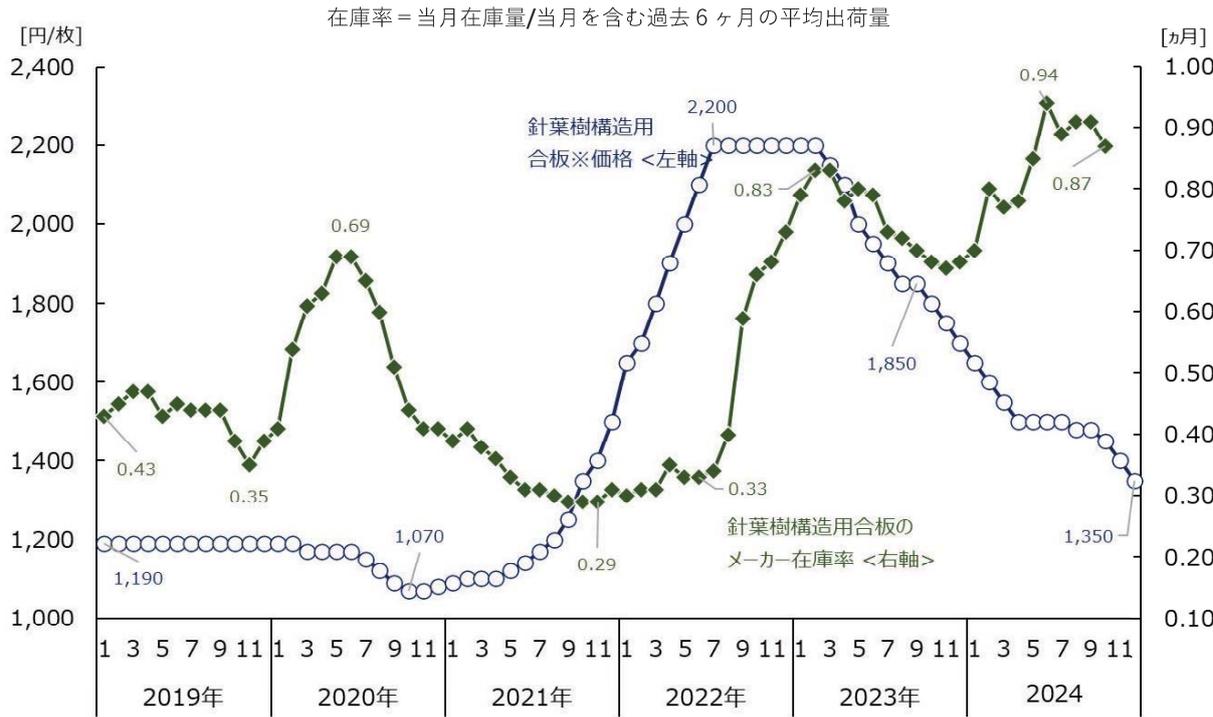


	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
1～10月原木入荷量合計(千m <sup>3</sup> )	14,174	12,268	13,812	13,990	12,578	11,891
2019年との比較*	-	87%	97%	99%	89%	84%
1～10月製材品出荷量合計(千m <sup>3</sup> )	7,666	6,736	7,536	7,197	6,648	6,150
2019年との比較*	-	88%	98%	94%	87%	80%

\*コロナ禍前の2019年の数値を100%とした比較

参考図表 4

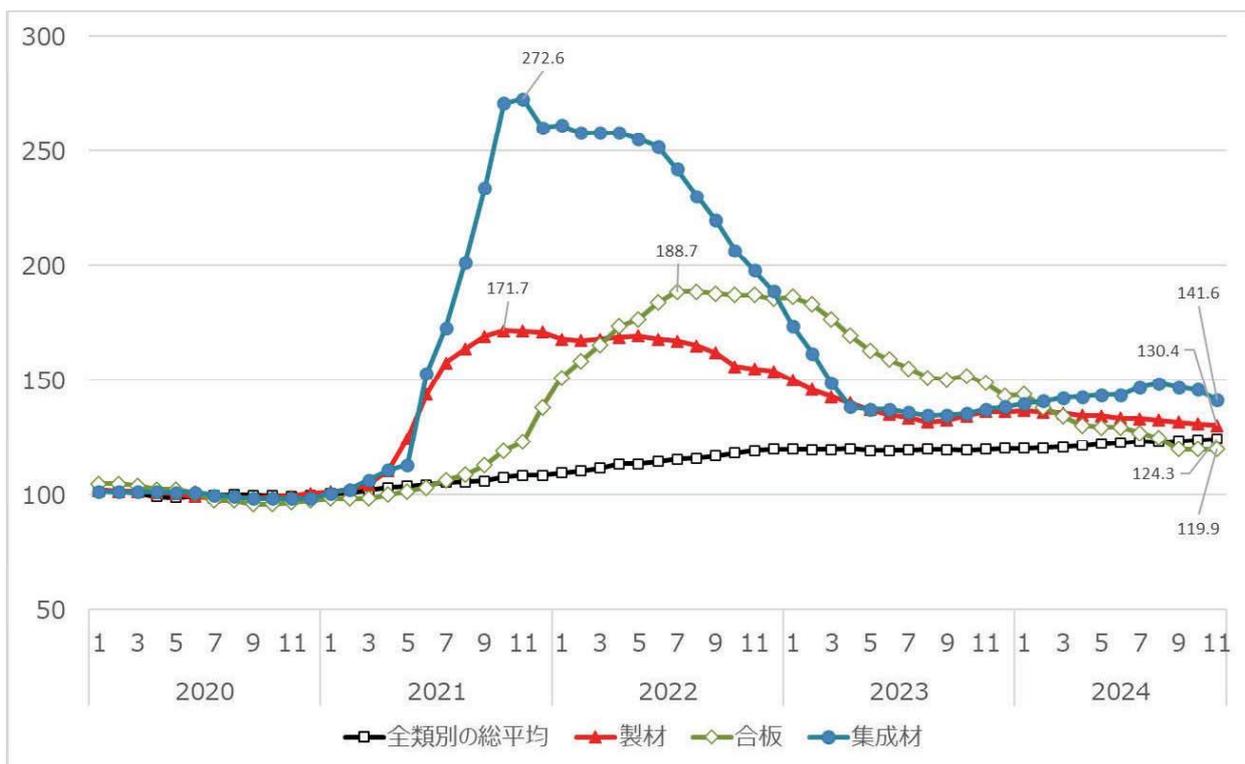
針葉樹構造用合板価格と合板メーカー在庫率の推移



※12.0mm×91cm×182cm、1類

資料：農林水産省「合板統計」、日本木材総合情報センター「市況検討委員会資料」

## 国内企業物価指数の推移（2000年平均 = 100）

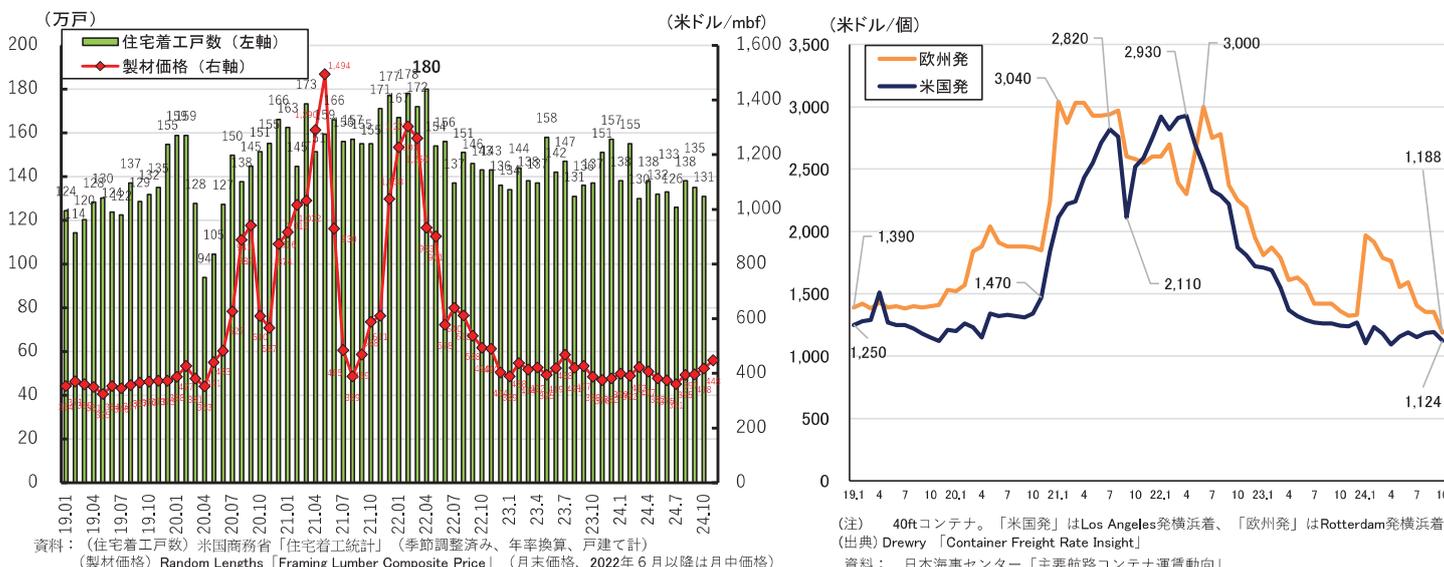


資料：日本銀行「企業物価指数」

## 米国における木材価格の動向等

資料：木材輸入の状況について (林野庁木材貿易対策室)

- 米国の住宅着工戸数（戸建て計）は、新型コロナウイルス感染症の影響により2020年4月に急落。その後回復し、2022年5月からは概ね130～150万台で推移。2024年10月は前月比▲3%減の約131万戸。
- 北米の木材価格は、2020年夏頃から大幅な変動を繰り返し、2021年5月には1,494ドル/mbf、2022年2月には1,303ドル/mbfを記録した後、2023年以降は概ね400ドル/mbf前後で推移。2024年11月は448ドル/mbf（前月比+7%増）。
- 日本向けコンテナ運賃は、欧州発、米国発ともに一時期高騰したものの、2023年末時点で概ね元の水準まで下落。しかしながら、2024年1月には、紅海でのフーシ派攻撃によるサプライチェーンの混乱の影響で欧州発が一時高騰。



米国における住宅着工戸数と製材価格の推移

日本向けコンテナ運賃の推移